

ADVENTURES OF
AN ACCIDENTAL
SOCIOLOGIST:
How to Explain
the World without
Becoming a Bore

ピーター・バーガー

Peter L. Berger

森下伸也 訳

退屈させずに
世界を説明する
方法——バーガー社会学自伝

「私の知的履歴は
一つの間違いから始まった。」

「十二番街のバルザック」をめざした学生時代から、世界中を駆けめぐる学者になった現在まで、その旺盛な活動の根底にあったのは、退屈させずに世界を説明したいという欲望。イリッチとの出会いなどの興味深いエピソードもまじえながらたどる、バーガー・ファン必読の学問的自伝。

新曜社

ADVENTURES OF
AN ACCIDENTAL
SOCIOLOGIST:
How to Explain
the World without
Becoming a Bore

ピーター・バーガー

Peter L. Berger

森下伸也 訳

退屈させずに
世界を説明する
方法——バーガー社会学自伝

新曜社

Peter L. Berger

ADVENTURES OF AN ACCIDENTAL SOCIOLOGIST

How to Explain the World without Becoming a Bore

Copyright © 2011 by Peter L. Berger
Japanese translation rights arranged with
Prometheus Books, Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

まえがき

二〇〇九年の夏、ブダペストの中央ヨーロッパ大学で講演をするよう招聘を受けた。何について講演してほしいのかと尋ねると、それはまったく私次第とのこと。私はそういうのが嫌いである。宣教師じゃあるまいし、ブダペストで説教すべきことなど何もないのだ。すると、「自己史」(ego-history)とよんでいる便利な形式があるといってきた。自伝という意味だろうか？ いやいや、彼らが言いたいのは講師の知的履歴——論じてきた問題、道々出会った人や出来事——に関する記述ということであった。それなら面白いかもしれない、と私は思った。講演した私が面白いと感じただけでなく、それを聞いた聴衆も明らかに面白そうだった。帰国して私は一冊の本にとりかかった。それがこの本である。

おなじ年の夏、ブダペスト旅行の直前、私はウィーンにいて、友人の娘と話をしていた。彼女は大学で社会学の勉強を始めたばかりなのだが、幻滅してしまったという。彼女は私の旧著『社会学への招待』を読んだことがあり、わくわくするような知的経験を期待していた。ところが逆に、すっかり退屈してしまったとのこと。最近ウィーン大学でどんな社会学が教えられているのか知ら

ない（故郷の町に帰ると、私にはオーストリア社会学の現状を検査すること以上に面白いことがあるのだ）。だが、もし当地のカリキュラムがヨーロッパの他の地域やアメリカで広く教えられているのと似たりよったりだとしたら、はなはだ聡明な乙女が退屈しても驚くべきことではない、と私は思う。

社会学をネタにしたジョークはごくわずかしかないが、その一つがここでピツタリだ。ほぼ間違はなく余命はわずか一年と医師に告げられた患者。このおそろしい宣告を受け容れたあと、どうすればいいかと医師に訊くと……

「社会学者と結婚して、ノースダコタに引越さない。」

「それで治るんですか？」

「いや、治りはしないけど、一年をずっと長く感じるよ。」

この数十年、社会学は二つの病を患っている——方法論的フェティシズム、すなわち数量的手法になじむ現象だけに研究を限定する傾向と、昔ながらのお題目をただくり返すだけ（時にポキャブラリーだけ増えている）のイデオロギー的プロパガンダである。どちらの病も退屈を深める。数量的手法それ自体が悪いわけではなく、有益な場合もある。だが往々にして、調査研究に要する高額の経費を進んで提供しようとする人々の利害に合わせようとすれば、ますます瑣末なテーマを探求するためのますます精巧な手法、という結果が生じがちなのだ。またイデオロギーのお題目についていえば、それらは三十年前にはたしかにわくわくするようなものであったかもしれないが、今日ではあくびを催させるだけという傾向が強い。もちろん例外もある。興味深く重要な著作を生む社

会学者もいるにはいるのだ。でもそれは少数派だと言つて差し支えないように私は思う。

私はウィーンの乙女に、社会学は退屈なものとは限らないよと言つた。もし社会学をずっと続けたいなら、退屈でないことを自分がやっていることに気づく日がきつと来るであろう。終身在職権テニユアつきの地位を得たあとなら特に、自分の好きなことを思うようにやれるようになる。小役人が仕切っている大学というところにもたくさんさんのニッチがあるし、給料もたいがい分に應じてそこそこあるし、（これがいちばん大事なところだが）毎年あの長い夏がある。社会学者には大学外にもいろいろと仕事がある。社会学を研究する者は、（人類学をのぞく）他のほとんどの社会科学と違って、非常に広範囲のテーマを論じることができるといふことができる。かねがね私はそう考えてきたのだが、社会学は人間世界の壮大なパノラマに限りない愛着を感じるひと、いま現実に何が起きているのを発見することに情熱を燃やすひと、——必要とあらば鍵穴を覗きこんだり、他人の郵便物を読んだりするひとに大変向いている。

大学院生時代、私は一度後者の罪を犯したことがある。当時の私のガールフレンドは法学専攻の若い女子学生とアパートをシェアしていた。彼女はひどくだらしない人間で、自分の持ち物を家中に散らかしていた。ある日トイレに坐っていると、私は彼女のボーイフレンドあての手紙を見つけた。私は高まる期待を抑えきれず、それを読んでしまった。中身はほとんど二人で過ごした週末の心理学的解剖で、一つ一つのできごとが基本的にはフロイト流の用語で説明してあった。彼が何を言つたか、ほんとうは何を言いたかつたのか、週末のできごとが彼の隠れたノイローゼとどう関係しているか、彼の母親がその状況でどういう立ち位置にいるか、これらすべてが手紙の書き手にと

ってどんな意味を持っているか、などなど。私はその手紙を盗んでしまった。それは後世のために保存しておかれるべき、きわめて貴重な文化的ドキュメントだと思ったのだ（言うもはばかられることながら、いつかどこかでそれはなくなってしまうた）。

* * *

最後に謝辞を。私の代理人、ローラ・グロスに感謝したい。彼女は終始とても協力的で、知性と人間としての温かさのたぐい稀な結合とともにそうなのであった。

退屈させずに世界を説明する方法——バーガー——社会学自伝* 目次

第1章 十二番街のバルザック……………13

十二番街を巣立つ 33

「どうすればペルシヤ人になれるか？」 43

第2章 ありえない地平……………57

やる気のない兵士とニセ心理セラピスト 58

「君はいまやプロテスタント教会に奉仕する身だ。それにふさわしく行動

したまえ」 66

デキシ―へ帰る―美女と悪漢 75

プロテスタントの微笑に包まれて 83

「書籍奔出」の始まり 92

第3章 派閥から挫折せる帝国へ……………101

十二番街へ戻る 102

指の練習 106

「君はほんとに文学者だねえ」 108

マニフェスト 114

「いったん神様ファンになったら、いつでも神様ファンさ」 125

二重の亡命 135

第4章 地球をトレッキングする社会学…………… 141

ジャーナリズム周遊 143

まぶしい陽光のなかの新思想 148

近代的意識とは何か 157

「君に悪い知らせがある」 161

再び神様ファン 170

第5章 あまたの神と無数の中国人…………… 174

神様が少なすぎる、いや多すぎる 174

香港の摩天楼 182

ひよっとしていい知らせ？ 193

第6章 過てる政治的小旅行……………201

「合衆国の名誉ある代表のお言葉に感謝いたします」 207

「非喫煙者も死ななければならない」 220

第7章 ムブルワからギュータースローへ……………231

国の変容を目撃する 238

「デリーからギュータースローへはどう行くか？」 250

まずい時に三冊の本 256

第8章 ソロイストではなく指揮者として……………269

箸をもつ資本家ともたざる資本家 274

「どっこいマックス・ウェーバーはグアテマラに生きている」 287

第9章 第一バイオリンを弾く……………309

コンピュータとヒンドウ教 309

テキサスの実業家とロンドンの無知なるコンシエルジュ 316

狂信なき確信 323

笑う社会学をめざして 330

国々 宗教の諸伝統 状況あれこれ 職業あれこれ

ある種のエピローグ、であって(いまのところ)墓碑銘ではない 338

訳者あとがき 341

ピーター・バーガーの主要著作 349

注 351

索引 362

装幀——難波園子

第1章 十二番街のバルザック

私の知的履歴は一つの間違いから始まった。私はニューヨークに定住した両親とともにアメリカへやって来た。十八歳になりたてで、宗教熱に浮かされていた（ジョン・マレー・カッデューが「文明の試練」とよんだ独特なアメリカ移民経験のなかで、私は幸運にもその宗教熱をすぐに失ってしまったが¹⁾）。私はルター派の牧師になりたかったのだ。ひよつとすると当時もう私はこの職業的志向に疑念をいだき始めていたのかもしれない。事情はともあれ、私は自分が将来仕事をしなければならぬアメリカの社会をよく知るために、神学の勉強にとりかかると決めた。だから私はそこで学んだ。社会学について私はごく漠然とした観念しか持っていなかったのだが、それが社会学について知るための正しい学問だと思われたのである。

私には金がなかった。両親にもなかった。私は糊口をしのぐため、また授業料を工面するためにフルタイムで働かなければならなかった。知る限り、ニュースクール・フォー・ソーシヤリサーチが、大学院の勉強をすべて夜間でできる市内唯一の高等教育機関であった。だから私はそこで社会学修士課程の履修登録をした。もちろん私は、ニュースクールがアメリカの社会科学界でどれほ

ど辺境に位置しているかなど、まったく知るよしもなかった。

えらく非情なユダヤ・ジョークがある。ある男がニューヨークのコーシャー・レストランに行った（「コーシャー」はユダヤ教式調理法）。驚いたことに、給仕してくれたのは中国人ウェイターで、客に優雅なりトアニア風イディッシュ語で語りかけてきた。帰りがけ、客はレストランの店主を見つけた。

「ウェイターが中国人なんだねえ？」

「ええ、去年、上海から来たんですよ。」

「だけど完璧なイディッシュ語をしゃべるじゃないか。」

「シイーツ」と店主は言った。「自分は英語をしゃべってるって思ってるんですよ。」

私はアメリカの社会学を勉強しているつもりでいたわけである。最初の学期、私には一科目しか履修する資力がなかった——それが私がはじめて取った社会学の科目である。アルバート・サロモンが教えるその科目は「社会学者としてのバルザック」といった。そのアイディアは素晴らしく、サロモンは素晴らしい先生であった。それはまた教育上まことに妥当なアイディアであった。バルザックは彼の小説集成『人間喜劇』を、貴族から犯罪がらみの下層社会にいたる十九世紀フランス社会の全体構図たらしめんとしていた。そして実際、その小説群は当該社会の多数の階層の詳細なパノラマとなっている。サロモンがその授業でおこなったのは、バルザックの著作を用いて社会学の主要な諸概念——階級、権力、宗教、社会統制、社会移動、周辺性、犯罪など——を学生たちに手ほどきすることであった。私も学期のあいだにバルザックの小説を最低十冊くらいは読んだはず

だ。

權威的教授たることに何のためらいもなかったサロモンは宿題を出した。私にあたえられた宿題は、ひとりのセールスマンをめぐるバルザックの小説『名うてのゴディサール』について、当時出たばかりのアーサー・ミラーの演劇『セールスマンの死』と比較して期末レポートを書くことであった。私のレポート（まだどこかに持っているはずだ）は社会学的注釈としてはとても傑作と言える代物ではなかったが、そのテーマに面白味を感じた。私は初期の資本主義の勝者たるバルザックのゴディサールと、衰退局面の資本主義を体現している（とサロモンが見なした）ミラーのウィリー・ローマンとを比較したのだった。

学期の終わりには、私は十九世紀フランス社会と随分なじみになっていたが、二十世紀アメリカ社会について無知であることは、バルザックへの冒険以前と変わりなかった。だが私は、サロモンが情熱をこめて詳しく説明してくれた社会学的なものの見方がもつ興奮の感覚を会得していた。

（この当否はともかく）サロモンがバルザックにそなわっているとしたこのものの見方は、人間行動のあらゆる側面、とりわけ通常は視界から隠蔽され、とりすました世界では否定されている側面への尽きることのない好奇心である。それは本質的に冷笑的で、暴露的で、破壊的なもの見方である。バルザックがほんとうにサロモンの描いたとおりであったかどうか、私にはわからない。パリの街路、しかも好んで夜の街路を、その秘密を探りながら歩く——この街のサロンで、行政官庁で、企業で、酒場で、売春宿で起きていることすべてを理解しようとして歩くバルザック

ク。だがそれこそ私の頭に刷り込まれた社会学者のイメージであり、たとえ長い年月のうちに若さゆえの過激さが多少緩和されたとしても、今日までずっとそのままなのだ。

フランス政府はアッパー五番通りの宮殿のような建物のなかで文化的中心の位置を占めていた。たぶん野蛮なるアメリカでフランスが果たすべき文明開化の使命 (mission civilisatrice) をにやう代理機関たらしめんとする意図をもつて、それはいまでもそこにあると思う。そのころそこでたまたまバルザック関連の催しが開かれ、展示やいくつかの講演がおこなわれたのだが、どんなものだったかひとつも思い出せない。だが、バルザックのカリカチュアの複製がついた魅力的なカタログもあって、彼はその絵のなかである種の修道僧の頭巾つき外衣を着、その上には疑い深そうな表情をした大きすぎる頭が乗っかっているのであつた。私はその絵を切り抜き、額に入れた。それはいまでも私の書齋にかかっている。

それは私が研究を始めたころに得たもう一つの洞察を思い出させる——よき社会学はよき小説と血縁関係にあり、ひとは小説から社会について多くのことを学びうるといふ洞察である。ニユースクールでの勉学時代に、私はニユースクールの成人教育部で教えているフランス文学の教授と知り合いになった。彼は自分の勉強について語る私の話を聞いて、こう言った。「君は僕らと同類だ。君は文学者 (littérateur) だ」。彼はお世辞でそんなことを言ったのであろう。後年、私は時として蔑称としてのこの言葉でもてなされるようになった。

ニユースクールは一風変わった場所で、一風変わった歴史があつた。設立されたのは一九一九年、アメリカの学界に息苦しい雰囲気を感じ、それに失望した知識人の集団によって設立された。

彼らは「成人のための大学」を作りたいと思ひ、それは現実になつた。それは本質的に成人教育のプログラムであり、学位はまったく出さなかつた。誰でも入学でき、(たとえば仏教の形而上学のような)きわめて深遠なものから(陶芸のような)きわめて実用的なものまで自由に科目を選択できた。このプログラムはほぼたちどころに人氣が出て、経済的に自立できた。それは今日まで存続し、ニューヨークの著名な研究機関となつてゐる。私が在籍した大学院を含む他のプログラムが成人教育事業に加えられ、少なくとも当初はそこから資金を調達した。

ニユースクールの創設者のなかには、たとえばジョン・デューイのような傑出した学者が何人かいた。アメリカの古典的な社会学者の一人ソースタイン・ヴェブレンもしばらくここで教鞭をとつた。だが、設立当初から学長はアルヴィン・ジョンソンで、一九五〇年代になつてもまだその地位にあつた。彼は風変わりで、激しやすく、起業家精神にとんだ教育者で、ヴェブレンとじつによく似てゐるが、ノルウェー人を祖先として中西部の北部に生まれた。彼の娘フェリシア・デイラップ(驚くほど物静かで、絶対に激することのない人物であつた)は経済学を教へてゐた。

一九三四年、ジョンソンはナチスの迫害を受けるドイツの学者たちの運命を憂慮した。ほうぼうから資金をかき集めて、みづから亡命のヨーロッパ大学とよぶものを開始したが、すぐにそれはニユースクール・フォー・ソーシヤリサーチ政治学・社会科学大学院と改称された——しかしこれではあんまり長すぎるといふので、ふつうは略して「大学院」とよばれた。当初の教授陣は全員ドイツ出身で、なかにはユダヤ人もいれば、そうでない者もいた。ナチ帝国が拡大するにつれて他のヨーロッパ諸国——オーストリア、イタリア、スペイン、フランス——から来た学者たちがこれに

加わった。なかには、その後シカゴ大学へ移籍し、大きな影響力を持つ政治哲学派の基礎をきずいたレオ・シュトラウスや、戦後フランスへ帰国したクロード・レヴィ・ストロースのような大変な著名人もいた。

大学院は最初から認可を受け、いくつかの分野——哲学、政治学、社会学、経済学（のちに人類学も加わった）で修士と博士の学位を出すようになった。この組織はきわめてユニークであった——成人教育プログラムの上に社会諸科学の大学院が置かれ、学部のプログラムはなかったのだ（これまただいぶ後になって加えられたが）。

大学院と成人教育プログラムは接点がほとんどなかった。だが、後者のプログラムが起源となったことは、ニユースクールに一つの特異な結果をもたらした——すべての授業は午後遅く、または夜間におこなわれたのだ。具体的にいうと、一コマ二時間で三コマ、開始時間は午後の四時、六時、八時であった。この事實は、すでにのべたように、ニユースクールで勉強しようという私の決断にとって決定的に重要であった。だがまたそれは場の雰囲気も決定した——ノクターン的で、どこか神秘的で、エロティックな気配——、すなわち、私の好みでいえばバルザック的な気配である。これに加えてグリニッジ・ヴィレッジという場所。それはニユースクールをそのボヘミア的な雰囲気で包んだ。言うまでもなく、私の年代の若者にとって、これらは合して陶然たる経験となった。

私が学生だった一九五〇年代、ニユースクールは、五番通りと六番通りのあいだ、西十二番街十六番地に建物の一つあるきりだった。その建物に一切合財が詰め込まれていた——成人教育も大学院も合わせて教室のすべて、研究室と事務室のすべて、まことに粗末ながら図書館、カフェテ

リア、そして講堂。たくさんの部屋に、一九三〇年代の社会主義リアリズムの壁画が描かれていた。なかにはメキシコの革命派画家ホセ・クレメンテ・オロスコが描いた巨大な壁画もあり、それはレーニンとスターリンの英雄像を中心とするものであった（一九五〇年代、教授団による白熱した討論の結果、それは全面を覆うカーテンの背後に隠されることになったが、見たいと思えばカーテンを引き上げてくれるよう頼めるのであった）。「図書館」はほとんど存在しないに等しかった。というのも、そこが所有しているごくわずかな書籍はいつも貸し出されていたのだから。

わかれわれの図書館は五番通りをずっと北へ行ったところにあるニューヨーク公立図書館で、私はいけばいけば美しい内装の一般向け読書室で、また後には東洋コレクション（学位研究にはそれが必要であった）の読書室で、長時間過ごした。カフェテリアはグリニッジ・ヴィレッジでいちばんナンパに適した場所の一つとして有名で、その評価はまことに妥当なものであった。テーブルに広げたカフカやサルトルのコピー越しに、燃えるようなまなざしがどれほど多く交わされたことであろうか！

革命派の壁画（どのようにしてニュースクールにやって来たのか私は全然知らない）についていえば、それはある種の古傷となっていた。ニュースクールは左翼だといううわさを立てられ、アメリカ共産党の幹部養成校であるジェファソン社会科学学院と混同されることもあったのだ。教授陣はこのうわさに——ひいてはカーテンに——反駁したいと熱望していた。じっさい、移民教授陣の中核は社会民主主義から中道穏健右派あたりであり、信念としての反ファシズムに加えて猛烈な反共主義であった。事実、大学院の憲章には、その教育内容について外部組織の指示を受けるような